慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディルタイとヘルムホルツ : 影響史の諸相
Sub Title	Dilthey und Helmholtz : Aspekte einer Wirkungsgeschichte
Author	Lessing, Hans-Urlich(Funayama, Toshiaki) 舟山, 俊明
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1996
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.43 (1996.) ,p.19- 29
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000043-0019

ディルタイとヘルムホルツ

——影響史の諸相——

Dilthey und Helmholtz

——Aspekte einer Wirkungsgeschichte——

H.-U. レッシング著*
Hans-Urlich Lessing
訳：舟　山　俊　明*
Toshiaki Funayama

[訳者解題]

本稿は，H.-U. Lessing: Dilthey und Helmholtz, Aspekte einer Wirkungsgeschichte, in: Deutsche Zeitschrift für Philosophie 43 Berlin (1995) 5 819–833. を訳出したものである。著者レッシングは，現代ドイツにおける中堅のディルタイ研究者として，とりわけディルタイ哲学の形成史に関する実証的研究の第一人者として活躍しており，ディルタイの「歴史的理性批判」構想の成立過程を，同時代の哲学潮流のみならず近代生理学や心理学の展開との関係で解き明かそうとしてきている。この方面の研究成果としては，主著の Die Idee einer Kritik der historischen Vernunft, Wilhelm Diltheys erkenntnistheoretisch-logisch-methodologische Grundlegung der Geisteswissenschaften, Freiburg/München 1984 のほか，論文に Dilthey und Lazarus, in: Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaften Bd. 5, Göttingen 1985, 57–82. や Dilthey und Johannes Müller, in: M. Hagner/B. Warig-Shmidt (Hg.), Johannes Müller und die Philosophie, Berlin 1992, 229–254（拙訳「ディルタイとヨハネス・ミュラー」『ディルタイ研究』第6号，日本ディルタイ協会 1993, pp. 17–32 所収）がある。

本論文で著者は，ディルタイの精神科学の基礎づけにおける認識論上の中心的問題であった「外界の実在性 Realität der Außenwelt」問題（今日的言い方をすれば主体—客体問題）の扱いを，同時代の新カント派哲学に依拠した自然科学的心理学の代表者であったヘルムホルツ (Hermann von Helmholtz, 1821–94) の知覚理論との対決とその克服の試みとして描き出している。ディルタイにとって近代認識論は，「意識の事実 Tatsachen des Bewßtseins」そして「現象性の命題（原理）Satz der Phämomenalität」から出発するとされ，その点で実証主義・経験主義にも超越論哲学にもそしてディルタイの立場にも変わるところはない。しかし，この原理を主知主義的に理解するといわゆる「現象主義 Phänomenalismus」に陥り，それは精神科学から実践への力を奪うものとなるという。こうした欠陥が実証主義にも，そしてヘルムホルツもそれに属する超越論哲学にも存在するのであって，この克服こそ自身の課題であるとし，現象主義をもたらす主知主義にかえてディルタイは意志，感情，知性の連関した総体としての「全体的人間 ganze Menschen」を基礎に据え，この人間のとりわけ意志の志向阻止の体験すなわち「抵抗経験」が外界の実在性を証左するものであるとするのである。そしてこうしたディルタイの認識論的立場の確立にとって，ヘルムホルツは重要な対話相手であったのであり，その対決のプロセスを解明することが本論文の骨子を成している。

近年のディルタイ研究によれば，著作集18巻以降の刊行によって，精神科学の基礎づけをめぐるディルタイ哲学の展開を「心理学から解釈学へ」の転回とするカノンとなっていた旧来の解釈図式の変更が促されてきている。それによって明らかにされてきたのは，初期および中期ディルタイにおける当時興隆しつつあった自然科学への，そして実証主義への並々ならぬ関心であり，また心理学的関心は後期においても消えることなく存在していたという事情である。このあたりの詳細ないきさつは未だ自明な部分が少なく，今後こうしたいわば「謎の老

* ルール大学（ボーフム）私講師（哲学）
** 慶應義塾大学文学部助教授（教育哲学）

人」の「謎」の部分の解明が待たれている現状である。

[本文]

ディルタイへのヘルムホルツの格別の影響を考えることが大方の予想に反することであるとすれば，拙論に付した副題はまずは驚きを与えるに違いない。1850 年以降のドイツ哲学にとって，ヘルムホルツの有する意義には確かに異論の余地がない。通例では，ディルタイもそのように語るのであるが，ヘルムホルツはツェラー (Eduard Zeller) やフィッシャー (Kuno Fischer) とともに新カント主義の開拓者の一人に名を挙げられる[1]。19 世紀後半の代表的な自然研究者であるヘルムホルツと，同じく，著名な精神史家で哲学者であったといってよいディルタイとが，1882 年にディルタイがロッツェ (Lotze) の後任としてベルリンに招聘されて以来，ベルリン大学で相並んで教鞭を執り，相互に評価し合う関係を維持し，私的な関係を積み重ねたという事実もまたおそらく周知のことであろう。しかしその影響に関して，ディルタイがヘルムホルツの研究方向について，通常考えられる程度を越えた関心に基づいた知識を持っていたのだ，と言うためには，徹底して根拠付けが必要である。本稿は以下において，ディルタイがヘルムホルツの知覚学説の特定の前提を批判的に受容することでディルタイ自身の生の哲学の端緒を定式化する契機を与えられたという事実を明らかにすることによって，この根拠付けを報告するものである。ディルタイの重要な認識論関連の著作である。1890 年のいわゆる「実在性論文 Realitätabhandlung」は，たとえ明示化されていないにせよ，わけてもヘルムホルツの知覚学説に含まれる諸前提や帰結との対決であった。これが本稿での私のテーゼである。この批判的対決を考察することで，ディルタイ哲学の中心的で体系的なモティーフに光明をあてることができ，そうすることでディルタイの一連の哲学活動とその基盤の理解をさらに深めることにもまた貢献できるであろう[2]。

1

1897 年 9 月 19 日，友人であったヨーク (Graf Paul York von Wartenburg) の死後数日して，彼の子息であるハインリヒに宛ててディルタイは次のように書いている。貴方の父上は，「ヘルムホルツを除けば，私の出会った中で最も才能豊かで偉大な人物でした……」[3] と。ヘルムホルツに対する尋常ならざる評価を下しているこうした言葉は，ディルタイの著作の別の箇所にも見出せる。ディルタイにとってヘルムホルツは，その時代の最も重要な自然科学者であり，19 世紀後半の自然科学的精神の「真に」代表者そのものであった。ディルタイは，ヘルムホルツの二番目の妻アンナに捧げた簡単な伝記的素描の中で，ヘルムホルツの「天与の人格」[4] について語り，これに付け加えて「数学，物理学，生理学そして哲学を問題解決の手段として同等の重みで用い，そしてそれらを結び合わせるヘルムホルツの包括的な才能をみると，世紀の自然科学的精神全体が彼の中に代現しているように見える」と言う。事実まさに，ディルタイにとってヘルムホルツとは，徹頭徹尾「自然科学的精神の化身」[5] そのものであったのである。それはまた様々な自然諸科学を哲学的な省察と結び合わせることでもあったが，ディルタイがヘルムホルツに感嘆したのもこれであった。そういうわけで彼は，1883 年の終わりにヨークに宛てて「ヘルムホルツがその関心の広さによって数多の自然研究者と如何に違っているか，という事実について語るにはすべがない」と書いている[6]。

ディルタイによって行われたヘルムホルツの才能の格別の評価を証明する同様な事実は，ディルタイが彼自身の主著である『精神科学序説 Einleitung in die Geisteswissenschaften』の第一分冊 (1883) のモットーに，「知覚における諸事実 Die Tatsachen in der Wahrnehmung」というヘルムホルツの論文からの引用を選択したことである。その引用とは，「ちなみにこれまで現実は，神話的な空想や形而上学的な思弁を尽くすことで目に見えるよう叙述してきたよりも一層，現実の法則を真摯に求める科学に，崇高にして豊かにその姿を開示してきたのである」[7] というものである。

ディルタイが度々にわたり表明してきた，ヘルムホルツに対する通常を越えた賛嘆と崇拝は，偉大な研究者を前にした一般的な尊敬を遥かに越え出ている。ディルタイにとってヘルムホルツは，いわば遠くから仰ぎ見る偉大な精神以上のものであったのであり，ディルタイの思考に過小評価すべきでない直接的な影響を与えていたのである。ディルタイの思索過程における格別の段階，たとえば『精神科学序説』の枠内において「歴史的理性批判 Kritik der historischen Vernunft」の体系的な完成をめぐって努力していた時期と関連した段階（凡そ 1880–1896）において真の対話相手となったのが，――ヨークと並んで――ヘルムホルツであったというわけである。

ところで，ディルタイへのヘルムホルツのこうした影響は，確かに一見するところでは全く自明なことではな

い。一方は傑出した自然科学者で医者にして物理学者であり，他方は，詩人・歴史家・青年シュライエルマッハーを介して活気を与えられた精神科学の哲学者，精神史家，「理解」心理学の創設者にしてシュライエルマッハー伝の作者であった。

しかし〔両者の相違がもたらす〕こうした緊張は，青年ディルタイが世紀中葉の実証主義的・自然科学的な精神の影響を大変強烈に被っていたという事実を思い浮かべるならば，その時は幾分和らげられるのである。ベルリンで強強を始めるにあたって，導きの学問としては自然諸科学が観念論的支配の優勢であった哲学に取って代わり，同時代の他の多くの人々と同じくディルタイもまた，近代自然科学との，そして自然科学的・経験主義的精神との対決[9]という必然の道を辿ることとなった。この新たな精神をカントと結びつけようと試みたヘルムホルツは，ディルタイにとってこの思索を決定的に代表する人物であった。ディルタイの最後のテキストである体系的研究集録(1911)の「まえがき」の中で，ディルタイはいま一度ヘルムホルツの個人的な影響とその思索の魅力——限界もまた——を描き出して，「側にいることを許された人は誰でも，この人物の印象を決して忘れることはできない。目にしうるものをすべて摑み取ろうとする冷徹な目，その〈音〉を聞き取ろうとする耳。ヘルムホルツにとっては，精神の世界は技(Kunst)の中に存在するにすぎないのである。その点で彼はランゲ(Lange)に似ていた。しかしここでもまた，歴史的世界は，外的知覚(äußere Wahrnehmung)からその基礎付けを始める一連の諸科学の中にはその場を持たなかったのである。何ものも作りだそうと望まないこと，これが実証主義に存在する途方もない力である。実証主義は，この外的世界の枠の中に精神的世界を〈填め込む〉ために，精神的世界を切断し縮めてしまった，このことが実証主義の弱点である」[10]と言っている。

しかし，こうした〔主証主義の〕思考が明瞭にマークされる弱点や欠陥を持っているにも拘わらず（「自然科学的哲学の諸概念は，私の中で活動するこの世界を充分に捉えることはできない……」[11]），初期のディルタイは疑いの余地無くこの自然科学的精神に惹き付けられもしていたのである。そしてその限りで，あらゆる留保を付しつつも，ディルタイは，ヘルムホルツへの，そして彼が公式化する「健康な経験哲学 gesunder Erfahrungsphilosophie」[12]への活き活きとした関心を示し続けた。なぜならディルタイ自身が経験哲学を意図していたからであった。勿論，「経験主義ではなくて，経験 Empirie, nicht Empirismus」[13]という標語を旨にしてではあるが。

ディルタイがその初期の時代より，ヘルムホルツのそうした方面の自然科学的出版物を追いかけてきたことは明らかである。それゆえ彼はベルリン時代の「哲学的諸科学の論理と体系に関する綱要 Grundriss der Logik und des Systems der philosophischen Wissenschaften」通称「1865年綱要」の中で既に，力の保持に関する[14]，そして生理学的光学と音感覚の学説[15]——これについてはディルタイ，そして大衆科学講演第三号(das 3. Heft der populären wissenschaftlichen Vortrage)[16]は書評もしている[17]——に関するヘルムホルツの研究に言及している。

ディルタイにとってバーゼルでの数年(1867-1868)は，ヘルムホルツ関連の一群の書評を生み出させた。バーゼルでの最初の講義（1867年夏学期）——ここで初めて心理学を講義したのであるが——は，ディルタイの知的発展にとって特別な意味で重要である。彼はその事情を1870年5月にシェーラー(Wilhelm Scherer)に宛てた大部の自伝的な手紙の中で表明して，「ここバーゼルでは人間学と心理学に取り掛かり，そしてそれによって全く新しい衝撃を手にしました。ヨハネス・ミュラー(Johannes Müller)とヘルムホルツが私を捕らえて放しません。一年にわたって私は友人ヒス(Wilhelm His)の生理学講義を聴講し，彼から解剖学の手ほどきを受けました」[18]と記している。バーゼルで受けた物理学的・生理学的なこれらの衝撃や刺激は，ディルタイの心理学講義全体を通じて，90年代に至るまで追求され続けたのであり，詩学の研究の中で格別の影響を与えることとなったのである[20]。

ミュラーによって基礎付けられヘルムホルツによって発展させられた特殊感覚エネルギー(die spezifische Sinnesenergie)の理論，それによれば人間の感覚の質は知覚される客体に依存するのではなく，刺激を受けた感覚神経の本性に依るものであるとするものであるが，この理論は，とりわけ精神科学を哲学的に基礎付けるというディルタイの計画の文脈においては，彼が認識論的省察をするさいにも意義を持つところとなった。この計画にとってヘルムホルツが担っていた意義は，トライチュケ(Heinrich von Treitschke)に宛てた（1882年6月中旬の）手紙の下書きなどによって伺い知ることができる。そこでは「他方で，私がここに来て以来既に何週間も過ぎ去ったが，ヘルムホルツの諸著作と取り組まなかった時など全くなかったであろう。そして生理学や数

学を真剣に勉強することで，ヘルムホルツが模範的に取り出した近代自然科学の根本原理を，精神世界をも包摂する一般的な認識論的連関へとそれなりのやり方で取り入れることが可能となったのである。そこから，精神世界は精神世界の規定を見出すであろうということ，したがってこの面に関してはまた私自身の精神よりも遥かに優れた精神を介することで，自らの立場を強化することをあてにしうるであろう，と確信したのである」[21] と書かれている。

しかしヘルムホルツの知覚理論は，ディルタイの思索にとっては，先ずは挑戦を必要とした。このことを証明しているのが 1884 年 12 月 31 日付けヨーク宛の手紙である。そこにおいてディルタイは，計画はされたものの決して完成を見ていない『序説』第二巻の継続研究について以下のように言っている。つまり「ヘルムホルツの知覚学説に対して持ちこたえうる学説を立てることが私にとってどれ程幸せであるかは，今では問題です」と記した後，付け加えて「いま私はヘルムホルツと争点のあれやこれやについて少しばかり話し合っています。昨日もまた［……］彼にとってその空間成立に関する学説の何が重要であるのかを，少なくとも再発見しました」[22] と言うのである。

2

ヘルムホルツの知覚理論との取り組みや対決は，広義においてディルタイの「歴史的理性批判」の計画のコンテキストに位置づけられるその方面の諸々の体系的文献や対応する諸講義にほぼ一貫してみられる。ヘルムホルツとのこのような論争は，一過的なものではなく，ディルタイの端緒にとって本質的である。つまりそれはまさに，精神科学の哲学的な基礎付け，という彼の認識論的・体系的な問題の中心に布置しているのである。このことを証明しているのが，ヘルムホルツの理論を批判し，ディルタイが言うような「維持しうる」理論に置き換えようとする，繰り返し企てられた試みである。ヘルムホルツへのディルタイの批判の中に，彼の哲学的な端緒の実体が示されているのであり，その実体に即して，ディルタイの哲学を「生の哲学」だとして冴えないラベル張りをするさいに考えられる諸々の事柄が説明されるのである。

ヘルムホルツの知覚理論との対決がディルタイの端緒にとっていかなる感染力を持っていたのかを明瞭にするために，精神科学を基礎付けるという彼の目論見の構造を簡単に思い出してみることにする。ディルタイの中心的な哲学的計画は，「精神科学の認識論的基礎付け」[23] という企てであった。すなわち彼の「試みは［……］，歴史学派の原理と，今日では歴史学派によって徹底的に規定された個別社会諸科学の研究とを哲学的に基礎付けようとする」[24] ものであった。彼の――未完成に留まった――体系的な主著である『精神科学序説』[25] はこれに奉仕するものとして存在したのである。この著作の内，二つの分冊，すなわち精神諸科学の概観と，――精神科学の基礎としての形而上学の破壊を意図した――形而上学的思考の崩壊の歴史を含む第一巻のみが公刊されたにすぎない。第二巻は本来の基礎付けを含むはずになっており，それのためにディルタイは四つの分冊を計画していた。第三分冊は，現代までの歴史的叙述を継続しなければならなかったので，第四から第六分冊が精神科学の本来の認識論的基礎付けのために取って置かれるべきであった。そしてこの基礎付けは，ディルタイの計画に従えば，狭義での認講論すなわち精神科学の論理学と方法論から成り立つべきものであったのである[26]。

そうした認識論的な基礎付けの問題を解決する条件としてディルタイが挙げたのが，「内的経験〔の客観的実在性〕を立証すること。外的世界が実在することが真であると実証すること。その次に，私達の内なるものの外的世界への移入という出来事によって，外的世界に精神的諸事実や精神的存在者が現存すること」[27] であった。

この短いが重要な一連の問題を介して，ディルタイの計画の本来の認識論的な中核が明らかとなる。ディルタイの意図によれば，精神科学の真に哲学的な基礎付けにとって不可避なことがらは，わけても外的世界の実在を証明することであった。なぜなら精神科学は要するに，物理的な現実に精神的な内容を読みとり探求するからである。したがって精神科学的な経験にとって，外的知覚と内的知覚との結合は構造上本質的なのであり，それゆえ実在性問題は精神科学の認識論の出発点に存在している。というわけで，ディルタイは「外的世界の実在性に関する私達の確信の根源と権利を問題にすることを，この基礎付けの最も執拗な謎」[28] と呼んだのである。

何故にディルタイが自分の基礎付けに近代の認識論の基礎的問題という荷を負わせたのか，これについてここで一つ一つ追跡することはできない。事実は，ディルタイが，いわゆるその「解釈学的転回 hermeneutische Wende」にもかかわらず，最後まで自分の基礎付けの構造の信頼性と一貫性とに固執したということである。先に引用した 1911 年の「まえがき」の中で，ディルタイは自分の体系的な省察の過程を再度素描して，「精神世

界の実在性」を正当化する第一歩はカントの時間理論への批判を通じて内的経験の実在性を主張することであり，第二歩は「思考の客観的妥当性」を正当化すること，最後に第三歩は外的世界の実在性を証明することであると言う。すなわち「さて，体験の現実性と体験を客観的に把握する可能性とが明らかにされているならば，そこから外的世界の実在性への道が開かれる」のであり，加えて「そうであるから今や，精神的世界の認識の基礎付けを始める関係は与えられており，その関係が精神的世界を可能にする」[29] と言うのである。

3

ディルタイの認識論の中心には知覚理論が存在している。彼は知覚理論において，言うならば意識の事実の「現象学 Phänomenologie」を基礎に，外的知覚と内的知覚とを扱った。外的知覚と内的知覚との結合を通じて精神科学の領野が開かれる[30]という事実はディルタイにとって本質的であるので，それゆえ内的知覚の現実性と時間の現実性を主張するという課題と並んで，外的世界の現実性を主張するという必然性が同じ位階に存在しているのである。したがって外的知覚と同様に外的世界の問題がディルタイにとって持つ意義はそこから生ずるのである。これに応じて，たとえば「外的知覚の成立と価値」とか「知覚とその相関概念：現実」といったタイトルで初めて行われた諸講義から，知覚の問題が取り扱われていたのである[31]。これらの部分で——もっとも早い部分が，いわゆる「バーゼル論理学 Basler Logik」(「哲学的学問の論理と体系 Logik und System der philosophischen Wissenschaften」1867/68 冬学期) の対応する個所である——明らかになるのは，ディルタイが後々までヘルムホルツの影響を被っていたことであり，そして彼はヘルムホルツのその方面の理論に言及し続けたのである[32]。

ヘルムホルツ批判はディルタイの体系的な省察の中核から生じてきたものである。ディルタイの認識論上の決定的な敵は，——ディルタイの根本テーゼでは——「現象性の命題 (原理) Satz der Phänomenalität」の一面的で「主知主義的」解釈から帰結するところの[33]現象主義 (Phänomenalismus) である。これに関連して解明にとりわけ役に立つのは「1885/86 年のベルリン論理学 Berliner Logik von 1885/86」(「論理学と認識論」) であるが，そこにおいてディルタイはその体系的なモティーフを望みうる限りの明瞭さをもって練り上げたのである。ここでディルタイは知覚理論の説明を，以下のような描写から始めている。つまり「あらゆる真摯な哲学の始まりを形作るもの，それは，私にとって存在するものは私の意識の内容としてのみ存在する，という洞察である」[34]。ディルタイによるこの通称「現象性の命題」は哲学の根本命題であり，「経験哲学の普遍原理」[35] である。ディルタイが言うように，この命題は「導き出されるのではなく，自己省察の中に与えられている」[36] のである。この命題から外的知覚の問題にとって与えられた帰結は，自己への関係 (Selbstbeziehung)——ディルタイはそれを「覚知 innewerden」として特徴付けたのであるが——とは反対に，客体は私達にとっていつも私達の主体に与えられているにすぎないということ，したがって現象 (Phänomene) として与えられていることである。すなわち「私達はそれを覚知するのではなく，それを表象するのであり，換言すれば，主体から区別されるものとして主体に対立させるのである」[37]。

勿論この命題は，「世界は私の表象である」というショーペンハウアーの公式がその例であるような，ディルタイが批判した「誤った現象主義」[38] と置き換えることはできない。いうところの現象主義がその最終的な結論において主張するところは，「現象としての諸対象は客観的妥当性を主張すべきではない」ということであり，さらに「外的世界の現存は私達にとって常に問題的 (polemisch) であり続けねばならず，私自身の状態でさえもが私達にとっては現象にすぎないのであろう」[39] ということである。現象主義と相対主義の背後には，現代の懐疑主義やニヒリズムが隠されている，とディルタイは言う。すなわち「もしもこの主義が正しいとされるならば，そのとき人間には，生活を導き社会を指導する諸原理や，あるいは認識の努力に報いるものを手に入れる如何なる手段もまったくないであろう」[40] と述べる。別様の言い方をもってすれば，精神科学の可能性もが疑問に付されることになるであろう。

ディルタイは現象主義の立場の決定的な誤謬をこうした点に見て取った。彼は，「外的現実の要素は表象のみである，ということは正しくない」と言う。バークリー，ヒュームそしてカントたちは，同種の誤りすなわち「現象性の命題の主知主義的 (intellektualistische) な読み替え」[41] に支配されている。したがって，認識論上ディルタイとの決定的な対立物である現象主義は，この命題の主知主義的な短絡に依拠しているのである。ここからディルタイは，この主知主義を，意識の事実を囚われなく考察する[42]——彼はそう言うのであるが——という戦略をとることで，訂正しようとした。そしてそれを通じ

て彼は，意志，感情，表象は一緒になって働き，それによって自己と対象との区別，自我と世界との区別を生み出す[43]ことを証明しようとしたのである。

認識論上の主知主義は，外界の現実性についての問いに答えるさいに，実に近似した結果を生じさせる。この問いに関する支配的な見解としてディルタイは，外界に対する信念は「単なる表象に基礎付けられている」という理解をひきつつ，そこで二つのヴァリエーションを区別している。

1. 「意識の内容を表象として向こう側に対置することを，意識の持つ導出できない固有な特徴として見なすか」
2. 「あるいは，この信念は諸感覚から諸対象へと導く推論の仕方に依拠していると取らえるか」である。

ヘルムホルツは後者の立場を代表する。ディルタイはヘルムホルツの「光学」と「知覚における諸事実」を証拠として示し，ヘルムホルツの中心となる言明に簡単に言及して，「ヘルムホルツによれば，私達は諸感覚の世界から諸対象の世界へと到達しうるのは推論によってのみであり，そうした推論は諸感覚を影響だとして考察し，諸感覚を生み出す対象を原因として導き出すものである。こうした推論の手順については私達自身は何も知らない。それゆえに推論の手順は無意識的なものと言われねばならない。その前提は因果法則である。対象が私達自身から区別されることから，因果法則の先験性が推論されうるのである」[45] と言っている。

それに対してディルタイは，議義の中で，簡単な批判的注釈を行った。「こうした理解は，事実の成り行きを逆転させるものである。原因と結果とについての抽象的な表象は，導き出された事柄である。その上，抽象的な概念が私達に如何にして生まれ得たのか，それについて表象することは誰にもできないのである。最終的には二重の状態，すなわち諸感覚と（それを基に）原因として推論された客体という二つの状態が生ずるのである。ところで，諸感覚から私達が何も知らない〔客体へと〕如何に推論されうるのか，これを考えることは困難であろう」[47] と。

4

主知主義に対する詳細に基礎付けられた論駁は 1890 年の有名なアカデミー論文「外的世界の実在性に対する私達の信念の起源とその権利に関する問いを解決するための寄与 Beiträge zur Lösung der Frage vom Ursprung unseres Glaubens an die Realität der Außenwelt und seinem Recht」，通称「実在性論文 Realitätabhandlung」の中に見られる。この中でディルタイは問題に対する彼自身の解答をも展開している。それはそれとして既に『序説』の中でディルタイは，実在性問題を取り扱うさいの原理を公式化しており，そしてそこでもまた——たとえ名指しをしないにしても——ヘルムホルツを批判の俎上に上げているのであった。同様にその原理は，1883/84 年以来の心理学講義の中にも見出され，外界の成立という問題の取り扱いの基礎になっていたのである。

ディルタイは，近代の認識論（ロック，ヒュームそしてカント）と同じく，「哲学の完全な基礎」[48] を意識の諸事実 (Tatsachen des Bewußtseins) の連関の中に認識したのであるが，この連関の「理解の仕方」という点からは彼らと相違していた。これまでの認識論に共通することは，「経験と認識とを，単なる表象に属する事情から説明したことである，とディルタイは想定する。度々引用される言葉をもってすれば，彼は自分と反対の立場を解明して以下のように言う。「ロック，ヒュームおよびカントが構成した認識主観の血管を流れているのは生の血液ではなく，たんなる思惟活動としての理性の薄められた液にすぎない。しかし私は，全体的人間について歴史的ならびに心理学的研究を進めてきた結果，認識やその諸概念（たとえば，外界，時間，実体，原因）を説明するにあたって——たとえ認識はこれらの概念をたんに知覚，表象および思惟という素材だけから作り上げるようにみえるにしても——いろいろな力を備えたこの全体的人間，この意欲的感情的に表象する存在者を，説明の根底におくようになったのである」[49]。

それゆえディルタイは，際だった言い方をすれば，古典的認識論の単なる「表象」という考えを「全体性 Totalität」[50] という考えに置き換えたのである。そこから彼自身の認識論的な企ての方法が生まれた。すなわち「……現在の抽象的科学的思惟のあらゆる構成要素を，言語や歴史の研究と経験とが示すような人間の本性全体から分離しないで，その間の連関を求めるのである。こうして，現実についての私達の心像や認識のもっとも重要な構成要素，たとえば一人の人間としての生の統一，外界，私達以外の諸個人，時間の中での彼らの生存と交互作用などはすべて，この人間の本性全体から説明できるのであって，意欲や感情や表象に現れる実際の生の過程は，この本性の異なった側面にすぎないことが明らかになる」[51]。

これを基礎としてディルタイはまた「外界の実在性に関する私達の確信の起源と権利に関する問い」[52] を再度取り上げ，この問題を解決する端緒を以下の言葉で描き出したのである。「たんなる表象にとっては，外界はいつも現象にすぎない。しかしこれとは反対に，意欲的感情的に表象する私達の全存在においては，私達の自我と同時に，また私達の自我と同等の確実さで，外的現実（すなわち，その空間的規定をまったく度外視しても，なお私達から独立した他の現実）が私達に与えられている。したがってたんなる表象としてではなくて，生として与えられているのである」。そして今まさに直接ヘルムホルツに向けられて「私達は結果から原因に遡る推理によって，あるいはこの推理に対応する過程によって外界について知るのではなく，むしろ原因結果についてのこうした表象そのものが私達の意志生活からの抽象にすぎないのである[53]と。

こうした生の哲学的な計画の具体的な遂行をディルタイは，「実在性論文」のなかで展開して見せたが，その限りでそれはヘルムホルツの知覚理論を克服しようとする試みとして理解することができる。勿論，ディルタイはそれについては公言していないのではあるが。ここでも論理学講義と同じようにディルタイは現象性の命題から出発し，その命題が「気付かれることのないやり方で」，彼が言うところの「誤った推論を介して」現象主義へと移行する様を示した[54]。ディルタイが明らかにしたように，現象主義にとっては，「人間の認識は，諸現象の間に矛盾のない連関を打ち立てること」にある。「私の知識は［……］，現象の地平を，それゆえ私の意識を構成する諸要素の連関の地平を越えることは決して［でき］ない」という事実が決定的である。したがって現象主義とは「学問を諸現象に，すなわち意識の中に立ち現れる諸感覚や情緒の状態に，それらの共存，連続そして論理的な関係に意識的批判的に限定することである」[55]。

現象主義の立場は現象性の命題から生ずるのであるが，それに以下の前提，すなわち「意識の事実：事物あるいは対象は表象可能な構成要素から，従って感覚，表象，思考過程から構成されている」[56] という前提が付加されているのである。ディルタイがその核心を「現象性の命題の主知主義的な置き換え」であると解釈する[57]現象主義の源泉を，彼は17世紀の数学的自然科学の特定の傾向の中に認めた。「この傾向は，人間の認識のために，感覚の中か知性の中かに一義的に与えられている単純で悟性に相応しい諸要素を求めた。そういうわけでそれは，客体をも諸感覚や諸感覚の統一の型式から構成されたものとして考察したのである」[58]。

ここでディルタイは現象主義の二つの流派を区別して，一方を経験主義と実証主義，他方を様々な変種をとった超越論哲学とする。「実証主義者は認識を，保存，同等，依存といった状態を含む諸形式の体系へと移し替えようと努める。カントは，空間，時間，因果性からなるある種の濾過 (Filtensein) によって数学的な自然科学の形式的概念を作動させて，そうすることで意識のこうした事実を構成する別のあらゆる要素を泥の付いた残滓として後に残したのである」[59] と言う。

ディルタイによれば，ヘルムホルツもまた，外界に対する私達の信念の起源を無意識的な推論を用いて説明しようとする点で，明確に主知主義的な前提の下にあることになる。その証拠としてディルタイが引用するのは，ヘルムホルツの『生理学的光学ハンドブック Handbuch der phsyologischen Optik』の第26章の中心的言明である。ヘルムホルツは「変転する諸感覚から，この変転の原因としての外的客体を推論することによって以外に，感覚の世界から外界の表象へと至ることは決してできない。したがって因果性の法則は，あらゆる経験に先行する思考の一つの法則として認められるのである」と書いている。それゆえ外界に対する事実上の信念は，ヘルムホルツにとっては，「私達の中でアプリオリに働く因果法則の存在を肯定する充分な証左なのである」[61] とディルタイは言っている。

いわば超越論的因果法則というこの前提とそこから帰結する仮定，すなわち外界に関する知識は作用から原因を推測することである，とする仮定を批判することに，ディルタイのその後の論議は向けられていた。ディルタイによれば，外界の意識は純粋な思惟の過程の中で成立するのではないということ，これが彼の根本テーゼである。それに代えてディルタイは，問題に答えるにあたって，――既に『序説』でプログラム的に公式化されたように――「経験的な生の充溢した人間を基礎に」置いたのであり，そして「衝動の体系の，意志の諸事実の，そしてこれに結びついた感情の広範な働き」を立証しようと欲したのである，と彼は書いている。結局のところディルタイは，「外界の実在性は仮説という価値しか持たない，とする仮定を越え出ることをも」[62] 望んだのであった。それゆえ外界の意識を説明するディルタイの原理は，人間の諸力の全体性という考えを基盤にしている。「外界に対する信念を，思惟の繋がりからではなく，衝動，意志，感情に与えられた生の連関，加えて思惟の諸過程に相当する諸過程を通じて仲介されている連関か

ら説明する」[63] と言うのである。

したがってディルタイは，一方で「感覚知覚の知的性格 Intellektualität der Sinneswahrnehmungen」という標語のもとヘルムホルツの洞察に賛成してこれを受容し，そこに遡って話しを始める。外界に関する私達の意識が成立する場合，そこでの思惟過程の構成的な意義を帰納的にそして実験的に証明することによって，ヘルムホルツは「不滅の功績を獲得」し，その研究を通じて直観主義を，すなわち外的事物の直接的所与という学説を「最終的に」退けたのである。「実在の思惟的な経験を惹き起こす，媒介的な思惟の諸過程が常に必要である。こうした経験の直接性に拘る主張は，基礎となる心理学的分析が欠けていることから生ずるにすぎないのである」[66] と述べる。

勿論他方では，そしてここでディルタイはヘルムホルツと根本的に袂を分かつことになるのであるが，外界意識の基礎は知的連関，思惟連関ではなく，ディルタイが誇張を交えることなく「生の連関」と名付けたものである。「私達の中には，意識の中では相互に明瞭に際だってみえる多様な内的諸過程，つまり感覚，表象，感情，衝動，意志〔といった諸過程〕が認められる。こうした諸過程は，心的生の構造の中ではお互いに結び合わされており，この地上のあらゆる動物にとって同じものであって，こうした生物の心的根本法則を形成しているのである」[67] と言う。

端的に言えば，心的生のこの構造は以下のようになっている。すなわち「諸々の印象や心像は，衝動と衝動に結びついた感情のシステムの中で，合目的的な反応を呼び起こす。こうした反応を通じて，随意の運動が引き起こされる。そうすることでそれ自身の生は環境に適合していくのである」[68]。それゆえ，ディルタイが表現するように，一匹の動物，一人の人間は，「内側から見られている」のであり，「あらゆるレベルにおいて，衝動，快・不快そして意志の束」[69] なのである。

ディルタイが外界意識に関して「生の立場」[70] から企てた説明の基本となる概念は「抵抗経験 Widerstandserfahrung」であり，その基礎には「生の構造 Struktur des Lebens」というコンセプトが存在している。「私自身が客体から区別されるという経験の図式は，随意的運動の意識と，この運動が出会う抵抗意識との間の関係に存在している」[71]。その論議の中身は，一方では，「抵抗感覚には［……］私に依存しないものは直接的な意志経験の中には与えられていない」ということを述べている。しかし他方では，これはヘルムホルツに対して向けられていて，「外界の実在性は意識の事実 (Datis) から推論されているのではないということ，すなわちたんなる思惟の過程を通じて導き出されているのではないということが言えるのである。向こう側から何かを告げる意志経験，つまり抵抗経験に含まれていて私達に依存しないものの核となる生命力にあふれた実在をまっ先に開示する志向の阻止は，むしろ意識過程によって媒介される」[72] ということである。それゆえ外界の意識は「意志の体験」であり，外界に対する信念は，意志の経験の中で，「衝動と抵抗の経験」[74] の中で私達に与えられている[75]。したがって生にとっては，外界は確固として与えられているのであって，しかも推論によってではなく，活き活きとした直接的な経験[76]としてであるわけである。そこからしてディルタイによれば，因果性の観念は，決して優先的なものでもアプリオリに所与のものでもなく，むしろ私達の意志活動からの抽象であるのである[77]。

いわばここがディルタイのヘルムホルツ批判の「頂点 höchster Punkt」であり，そして同時に，遺稿となったテキスト「生と認識 Leben und Erkennen」（およそ 1892/93 年頃）[78] の中で彼がその根本特徴を説明した哲学的な論理学の基本となる考えである。

5

後になってディルタイは，その「体系—講義」（「哲学的体系の根本特徴 System der Philosophie in Grundzügen」）において再度取り上げるところとなった[79]ヘルムホルツの知覚理論の主知主義的な諸前提を，生の哲学的に超克することで，近代哲学の論争となった認識論上の中心的問題を解決するさいの基礎を創り出し，同時に「全体的人間 ganze Menschen」[81] へと立ち戻ることによって「現象主義を超克」[80] するとともに自己の哲学の根本的なモチーフを明らかにしたのである。彼の場合そのモチーフは，認識論の基盤だけでなく，論理学や心理学の基盤をも形成した。ディルタイには，彼がかつて主体の客体に対する「架橋 Brückenschlagen」と嘲笑的に名付けた[82]通例の認識論上の図式を，彼自身の端緒によって突破することが可能となったのである。

既に示してきたように，ヘルムホルツの知覚理論との批判的な対決の中から生み出された「実在性論文」の主たる帰結を最後にもう一度簡潔に総括しておこう。ディルタイにとって，外界の実在性の存在は直接的に確実なわけではない。従ってこの点において，彼とヘルムホルツとの関係は肯定的である。媒介する思惟の過程が常に

不可避なのである。すなわち「意識を超越し独立したものに関する知識は，直接与えられているわけではない」[83] と言う。

だからといって，この知識は強制的なやり方をとった推論を通じて獲得されうるのでもないのである。このテーゼは論争的な仮定を前提にしており，それは「法則性をもった思惟には意識の完全に彼岸に存在するものへの適用が可能である」[84] というものである。ディルタイは，「私達から独立したものの実在性は如何にして私達の意識に与えられているのか，そのもとに理解すべきことは何か」[85] ということに関する心理学的分析を進めることによって，この問題を回避できた。この分析を通じて示されたことは，自己と外界との区別という意識の中核が，「衝動と志向の阻止との関係，意志と抵抗との関係」[86] である。徹頭徹尾知覚や知性であるような主体はそうした区別に至りえない[87]，ということを彼は見出したのであった。

外界意識の源泉は衝動と抵抗のこうした経験に存在する。「ここにあるのは生それ自体である。生は変わることなく生それ自身の証明である」[88]。こうして推論―理論は根拠を持たなくなる。ヘルムホルツに対して，そして「外界の実在性に対する私達の信念の根拠に関する」(1884) 論文でヘルムホルツの理論に繋げられたツェラーに対して，ディルタイは以下のように主張した。「それ〔ヘルムホルツ達の理論〕に対して私の仮定は，外的なものを，原因というコンセプトに従属させることによって思考の中で構成するのではない，ということである。むしろ阻止や抵抗の経験には力の現前が与えられており，そこで私達はそうした力を私達から切り離された外的なものとして把握するに違いないのである。なぜなら，阻止や抵抗は衝動と同じように力を包含しているからである。私が力を行使する経験は衝動の意識の中にあるように，阻止や抵抗の意識の中に，力が私に向かって働くという事実が存在する」[89]。

したがってディルタイは，活き活きとした経験に与えられているものを分析的に叙述することによって，外界の実在性に対する信念を哲学的に基礎付けようと企てた。「外界の実在性に関する意識が，生自体を形作る意志，衝動，感情という諸事実に整理されることによって」[90]，現象主義は止場されているのである。彼が言うように，実在性は，意志の中に開き出るのであり，意志にとって完全に彼岸にあるものは「たんなる言葉」[91] にすぎない。それゆえディルタイによる実在性の証明は意志の経験に基づいており，それが第一のものである。したがってこのことは同時に，因果性の観念はいかなるアプリオリ性も要求することはできず，生の派生物として見なされるべきである，ということを意味するのである。つまり「作用と原因という概念は，意志の告示的な経験からの一般化ないし抽象化を介して成立した」[92] ということである。

6

ディルタイによるヘルムホルツの受容を考察するとき，ディルタイがヘルムホルツの物理学的・生理学的研究を彼自身の研究のために役立つものにしようとしたその熱意が目を惹く。しかし他方で，精神科学の哲学者がヘルムホルツによる 1862 年の有名な学長就任演説「科学全体に対する自然科学の関係について Ueber das Verhältniss der Naturwissenschaften zur Gesammtheit der Wissenschaften」からの影響を全く受けていないらしい，ということは極めて驚くべき事実である。このことはたとえばガーダマー (Hans-Georg Gadamer) とは反対である。ガーダマーの哲学的解釈学 (philosophische Hermeneutik) の企ては，かなりの程度において，この演説との対決から生じたものであった[93]。

ディルタイの精神の発展や作品に存在する謎を，それに相応しい決まり文句を使って表現することが再三試みられてきた。トレルチはこの謎を「ミルとシュライエルマッハーとを結び合わせる」[94] ディルタイの思想上の展開の大きなパラドックスと名付けた。ローディ (F. Rodi) が問題にしたのは「青年ディルタイのロマン主義的・実証主義的な二重性」[95] であったし，ガーダマーは「ロマン主義と実証主義の間」という相応の決まり文句を選択したのであった。これらの決まり文句は，確かにある意味で的を得ているが，しかし，内容を尽くしてはいない。ディルタイの「歴史的理性批判」の体系化を特徴付けるためには，少なくともここでヘルムホルツに関連させて示そうとしてきたように，ディルタイの中にある矛盾や，彼の哲学活動を特徴付ける緊張を表現しうるような別の決まり文句，すなわち「ヘルムホルツとヨークとの間」という表現が適しているのである。 (終)

注

1) W. Dilthey. Gesammelte Schriften, Berlin und Leipzig 1923ff., IV, 447 (以下においてこの版から引用する場合には，巻数をローマ数字，頁をアラビア数字で示す); Grundriß der allgemeinen Geschichte der Philosophie, hg. v. H.-G. Gadamer, Frankfurt a. M., 235.
2) ディルタイとヘルムホルツとの関係はこれまで長い間ディルタイ研究において注目を払われなかった。しかし

現在では以下の文献が刊行された。A. Orsuuci, Tra Helmholtz e Dilthey: filosofia e metodo combinatorio. Napoli 1992; 著者によるこの文献の紹介が, Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften 9 (1994-95), 342-344 に掲載されている。

3) Briefwechsel zwischen Wilhelm Dilthey und dem Grafen Paul Yorck v. Wartenburg 1877-1897. hg. v. S. v. d. Schulenburg, Halle (Saale) 1923, vi.
4) X I, 262.
5) X I, 263.
6) Briefwechsel zwischen Dilthey und Yorck, a. a. O., 37.
7) Vorträge und Reden, 2. Bd. 4. Aufl. Braunschweig 1896, 245f.; 第二分冊のモットーはゲーテの「ファウスト」から取り入れられていた。
8) V, 3: Grundriß der allgemeinen Geschichte der Philosophie, a. a. O. 231. を参照。
9) X I, 243 を参照。
10) V, 3.: 参照 V, 357f. 412.
11) V, 4.
12) XI, 262.
13) XIX, 17ff.
14) XX, 25f.
15) XX, 27.
16) XVII, 127f.
17) XVI, 320-327.
18) Der junge Dilthey, Ein Lebensbild in Briefen und Tagesbüchern 1852-1870. hg. v. C. Misch, Leipzig 1933, 283f. 1867 年早々（講義を始める前）のグリム (Herman Grimm) 宛の手紙を参照。そこでは「私の前にはヘルムホルツの光学があります。そしてラパポートでは物理学者や生理学者と席を供にしました。これこそ研究です！」と記されている。
19) Der junge Diltey, a. a. O., 285 を参照。
20) ミュラーの感覚生理学のディルタイ美学にとっての意義に関しては, 以下の文献を参照。F. Rodi, Morphologie und Hermeneutik, Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1969. H.-U. Lessing, Dilthey und Johannes Müller, in: M. Hagner/B. Warig-Schmidt (Hg.), Johannes Müller und die Philosophie, Berlin 1992, 239-254.
21) K. Gründer: Zur Philosophie des Grafen Paul Yorck von Wartenburg, Göttingen 1970, 53, 注 38) から引用した。
22) Briefwechsel zwischen Dilthey und Yorck, a. a. O., 47f.
23) I, xix.
24) I, xii.
25) Einleitung in die Geisteswissenschften. Vresuch einer Grundlegung für das Studium der Gesellschaft und der Geschichte, 1. Bd., Leipzig 1883 Ges. Schr. I.
26) 計画された第二巻の体系的な分冊の再構成は全集第 19 巻で企画された。第二巻の全体構想については, H. Johach/F. Rodi, Vorbericht der Herausgeber, XIX, ix-lvii に所収, と H.-U. Lessing, Die Idee einer Kritik der historischen Vernunft, Freiburug/München 1984 を参照。
27) I, 20. さらに V, 90 を参照:「なぜなら, 人間には普遍妥当的な真理が存在するからで, そうだとして, デカルトが初めて示唆した方法に従えば, 思惟は意識の事実から外的現実に向かって道を進まねばならない。内的経験の妥当性, 外界の実在性, 私達の感覚や空間理解, 思惟形式の認識価値を規定すること, 〔これら〕はこの道の中で最初で最も困難な段階である。この道が最初の一歩から厳密かつ正確に隅から隅まで測られることによってのみ, 個人的行為や社会的行為の諸原理もまたそれに可能な確実性を達成しうるのである。最終的には, 哲学の, いや全ての学問の本来の関心がここにあることは言わずもがなである。とりわけ現代においては」。
28) I, xviiif.
29) V, 5f.
30) たとえば XX, 276f. と 301 を参照。
31) 「諸現象の客観性」を基礎付けるディルタイの初期の試みは,「経験主義の必然的な帰結を形態化する」彼の努力の文脈に布置している。XVIII, 186f. を参照。
32) XX, 51-54; XVIII, 97ff. XIX, 189. XX, 176ff. を参照。
33) たとえば XX, 152 を参照。
34) XX, 169.
35) XX, 184.
36) XX, 169;「現象性の命題」に関しては, とりわけ XIX, 58ff. と V, 90. さらには G. v. Kerckhoven, Satz der Phänomenalität, J. Ritter/K. Gründer (Hg.); Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd. 8, Basel 1992 に所収, Sp. 1195-1198.
37) XX, 170.
38) 同上
39) 同上
40) XX, 171.
41) 同上
42) 同上を参照。
43) XX, 172.
44) XX, 173f.
45) XX, 174.
46) 同上
47) 同上
48) I, xviii.
49) 同上
50) XX, 152 を参照。
51) I, xviii.
52) I, xviiif.
53) I, xix.
54) V, 91.
55) 同上
56) 同上
57) V, 92.
58) 同上
59) 同上
60) H. Helmholtz, Handbuch der psychologischen Optik, Leipzig 1867, 453.
61) V, 93.
62) V, 95.
63) 同上
64) XIX, 335ff. と XX, 260 参照。
65) V, 94.
66) V, 127.
67) V, 95.
68) V, 96, さらに „Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie" V, 139-237. とりわけ 200ff.
69) V, 96; V, 206 を参照。
70) V, 136.
71) V, 98. 102 と 104f. を参照。
72) V, 104.
73) V, 133: XX, 276 を参照。
74) V, 98; 107, 123, 124 と 125 を参照。
75) V, 114.
76) XIX, 56 を参照。

77) さらに XX, 269ff. を参照。
78) XIX, 333–388.
79) XX, 264–277 を参照。
80) V, 97.
81) I, xviiif. と V, 95.
82) Briefwechsel zwischen Dilthey und Yorck, a. a. O., 55.
83) V, 128.
84) 同上
85) V, 130.
86) V, 131.
87) V, 130f. を参照。
88) V, 131.
89) V, 131f; 132 と 133 を参照。
90) V, 133.
91) 同上
92) V, 134.
93) H.-G. Gadammer; Gesammelte Werke, Bd. 1: Hermeneutik I: Wahrheit und Methode, Tübingen 1 986. 11f. と: Wahrheit und Methode. der Anfang der Urfassung (ca. 1956). hg. v. J. Grondien u. H.-U. Lessing Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenscaften 8 (1992–93), 131f. ガダマーとヘルムホルツの関係については, J. Grondin, Der Sinn für Hermeneutik, Darmstadt 1994 7ff. を参照。
94) E. Troeltsch, Gesammelte Schriften, Bd. 3: Der Historismus und seine Probleme, Tübingen 1922, 512.
95) F. Rodi, Morphologie und Hermeneutik, a. a. O., 60.
96) H.-G. Gadammer, Das Problem Diltheys (1984), Gesammelte Werke, Bd. 4: Neuere Philosophie: Probleme-Gestalten. Tübingen 1987 に所収, 406–424.